

Japan
Food
Research
Laboratories

試験報告書

第 103030669-001 号
2003年（平成 15年）04月24日

依頼者 オーブス株式会社

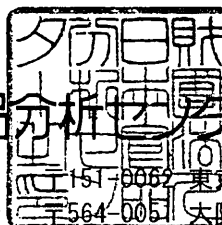
検体 W' PHIXZ-VOC液

試験項目 マウスを用いた急性経口毒性試験

2003年（平成15年）03月05日当センターに提出された
上記検体について試験した結果は次のとおりです。

財団法人

日本食品分析センター



東京本部 〒151-8062 東京都渋谷区元代々木町52番1号
大阪支所 〒564-0051 大阪府吹田市豊津町3番1号
名古屋支所 〒460-0011 名古屋市中区大須4丁目5番13号
九州支所 〒812-0034 福岡市博多区下呉服町1番12号
多摩研究所 〒206-0025 東京都多摩市永山6丁目11番10号
千歳研究所 〒066-0052 北海道千歳市文京2丁目3番

1 試験目的

検体について、OECD Guidelines for the Testing of Chemicals 401(1987)に準拠し、マウスにおける急性経口毒性を調べる。

2 検 体

W'PHIXZ-VOC液

性状：無色透明液体

3 試験動物

4週齢のICR系雌雄マウスを日本エスエルシー株式会社から購入し、約1週間の予備飼育を行って一般状態に異常のないことを確認した後、試験に使用した。試験動物はポリカーボネート製ケージに各5匹収容し、室温23℃±2℃、照明時間12時間/日に設定した飼育室において飼育した。飼料[マウス、ラット用固型飼料；ラボMRストック、日本農産工業株式会社]及び飲料水(水道水)は自由に摂取させた。

4 試験方法

試験群及び対照群ともに雌雄それぞれ10匹を用いた。

投与前に約4時間試験動物を絶食させた。体重を測定した後、試験群には雌雄ともに検体投与量として20 mL/kgの用量を胃ゾンデを用いて強制単回経口投与した。対照群には雄では0.7 mL、雌では0.6 mLの純水を同様に投与した。

観察期間は14日間とし、投与日は頻回、翌日から1日1回の観察を行った。投与後7及び14日に体重を測定し、t-検定により有意水準5%で群間の比較を行った。観察期間終了時に動物すべてを剖検した。

5 試験結果

1) 死亡例

雌雄ともに観察期間中に死亡例は認められなかった。

2) 一般状態

雌雄ともに観察期間中に異常は見られなかった。

3) 体重変化(表-1及び2)

投与後7及び14日の体重測定では、雌雄ともに各群間で体重増加に差は見られなかった。

4) 剖検所見

観察期間終了時の剖検では、雌雄ともにすべての試験動物の主要臓器に異常は見られなかった。

6 考 察

検体について、OECD Guidelines for the Testing of Chemicals 401(1987)に準拠し、マウスを用いた急性経口毒性試験(限度試験)を実施した。

本ガイドラインでは、被験物質が水溶液の場合、投与量は体重100 g当たり2 mL (20 mL/kg)を超えるべきではないと指示している。本試験ではこの用量で死亡例は認められず、剖検時にも異常は見られなかった。したがって、検体のマウスにおける単回経口投与によるLD50値は、雌雄ともに20 mL/kg以上であるものと考えられた。

表-1 体重変化(雄)

投与群	投与前	投与後(日)	
		7	14
試験群	29.0±1.1 (10)	33.8±1.4 (10)	37.4±2.1 (10)
対照群	28.8±1.1 (10)	34.1±1.9 (10)	37.1±2.0 (10)

体重は平均値±標準偏差で表した(単位:g)。

括弧内に動物数を示した。

表-2 体重変化(雌)

投与群	投与前	投与後(日)	
		7	14
試験群	25.9±1.1 (10)	28.3±1.2 (10)	31.8±2.7 (10)
対照群	25.6±1.0 (10)	27.5±1.8 (10)	29.5±1.8 (10)

体重は平均値±標準偏差で表した(単位:g)。

括弧内に動物数を示した。

以 上